

“沖繩のガンジー”

2018年9月10日

沖縄県知事選が13日に告示された。事実上2人の一騎打ちとなるが、その1人は北の離島、伊江島で出陣式を開いたと新聞は報じている。

その伊江島は、沖縄の縮図といわれるように、戦時中は熾烈な地上戦を経験し、戦後は米軍基地が建設された。その島に、実は“沖繩のガンジー”と称された人物がいたことはあまり知られていない。米軍に土地を奪われた島民とともに非暴力の抵抗運動を続けた阿波根昌鴻（あはごんしょうこう、1901—2002）、その人である。

この夏、私は普天間飛行場に隣接する沖縄国際大学にいた。2004年8月、米軍ヘリが墜落したあの大学である（注1）。4日間の集中講義を終えたあと、阿波根著『米軍と農民』（岩波新書）を携えて伊江島に渡った。その本には沖縄の「土地闘争」の原点になった闘争史が詳しく記されているが、その膨大な資料を集めた「反戦平和資料館」に出向いた。歴史的瞬間を収めた写真など実際の展示資料には圧倒されたが、印象深かったのはその入口の壁に大きく書かれた言葉であった。「すべて剣をとる者は剣にて亡ぶ」。

今回の選挙の最大の争点は言うまでもなく辺野古移設の是非である。同じく沖縄県人でも政治意識には世代間の相違があると聞くが、ここに“沖繩のガンジー”がいたら、今を生きる若者たちに歴史の真実を熱っぽく語りかけてくれるにちがいない。知事選の結果は今月末に判明する。

注（1）「沖縄の視点から」（高知新聞「声ひろば」2010年8月28日）参照。HPの新聞投稿に掲載。